

# 松村通信第66号

2006年12月21日  
松村勝弘

## 日本憲法思想史

少し前、元流通経済大学教授島田克美先生に、長尾龍一『日本憲法思想史』（講談社学術文庫、1996年）という本を貸して頂いた。忙しいので断片的に読み進めた。そして、気になることが多いので、長らく持ち歩いていた。早く返却しなければと思いつつ、どうしても手放せなかった。この本が絶版になっていたので、買えなかったと言うことも原因である。ところが、結局どうしても自分の物にしたいという気持ちが勝って、アマゾンで古本、それも定価の何倍もする価格になっているのを買ってしまった。それで読後感を書いてから返却しようと思っている。

それにしても、この本は興味深かった。明治憲法に対する美濃部達吉の天皇機関説については聞いて知っていた。これに対置されるべき学説として、穂積八束、上杉慎吉という系譜があるのをよく知らなかった。穂積八束に連なるタレントが以前話題になったことは知っていたが、この学統については知らなかった。また戦後の日本国憲法についても言及されていて、これは最近の憲法改正論議との関係もあって一層興味深いものであった。ただこの本を読んで、読み取るのに苦労したのは長尾教授が何を言おうとされているのかという点だった。何せ、時間のない中、断片的に読み進めたので、読み取るのに苦労した。結局、ここらあたりが結論だったように思う。かなり長いが紹介しておく。

美濃部と上杉、そして脱亜の風潮 「美濃部と上杉は甚だ対照的である。特に両者の権力とのつらなり方において、両者の履歴書を比較してみると、美濃部はじつに多くの政府系委員会の委員をつとめているが、上杉にはそれが無い。これは美濃部憲法学が、『合法的支配』に即した憲法理論であるのに対し、上杉は天皇や政治指導者のカリスマと、『人脈』を通じての人的支配の世界の人物であったことを象徴している。旧日本政治がこの両面の性格をもっていたことが、両者各々に権力中枢接近への途を開いていたのであろう。しかし合法的支配と対応しない憲法学なるものは法学としては破産である。上杉憲法学が法学アカデミズムから放逐され、政界の人脈を求めて放浪を重ねざるをえなくなったのは当然である。

しかしなお著者は、美濃部憲法学が真理と

正義の側にあり、上杉憲法学が虚偽と邪悪の側にあるという価値判断に直には同じない。美濃部の背後には明治維新を『文明開化』としてとらえ、国内における立憲主義の進展をもって歴史の大勢とみなす牧歌的な歴史解釈がある。しかし明治維新は、阿片戦争に始まる極東の危機、西欧帝国主義諸勢力が世界分割の爪牙を極東にのばしてきたことへの反応に他ならない。美濃部は西洋立憲主義のモデルをもって国内法体制を認識し解釈することに専心し、昭和初期の危機をも『議会制度の危機』としてしかとらえなかった。しかし昭和の危機はもとより世界的規模における経済的危機であり、また列強の角逐する極東の軍事的危機でもあったのである。戦後美濃部憲法学が真理と正義の側の存在だと考えられていることは、アメリカの庇護のもとでこのような危機に直接曝されることもなく、専ら国内の『民主化』に専心すれば事足りた状況と無関係ではあるまい。

上杉は世界大戦中に『退嬰苟守』、『縷々ノ命脈ヲ大国ノ間ニ維ク』か『大帝国ヲ世界ニ建立セントスル』かの決断に際して、後者を選択することは日本の宿命であると説いている。上杉の死後半年にして生じた世界恐慌は日本を未曾有の国家的危機におき、ここに『軟弱外交』は強引に圧殺されて『大日本力滅亡力』という『大試験』に突入したのである。国家主義運動もまたその過激さにおいて上杉の域を遙かに越え、結盟団事件においてはかつての七生社員で上杉の経営する『至軒寮』の住人であった池袋正鈞郎、四元義隆などの暗殺目標の中に、上杉の盟友床次竹二郎・牧野伸顕が居り、暗殺候補者の中には彼の恩師、彼の助教授推薦者、山県への推薦者たる一木喜徳郎もあげられていた。

上杉は、この『大試験』の際には『白人ヲ挙ケテ我ニ肉迫シ』、『呼応シテ日本滅ボササルヘカラスト為ス』であろうとしている。しかし実は我に肉迫したのは『白人』のみではなかった。なぜなら日本の西洋帝国主義に対する防禦の牙は、やがてアジアの侵略に向けられたからである。戦後日本憲法学は、占領軍のイデオロギーに従って、西洋と争ったこと、西洋的でなかったことのみを懺悔し、他のことは大方忘却した。戦後憲法学のエネルギーの大半は、日本における非欧米的要素の撲滅に費やされてきたといっても過言ではない。『脱亜』を志向する点においては少しも日本は異なっていない。『日本軍国主義者は

膨大な物力を誇るアメリカ，そして民主主義を誇るアメリカを相手に，勝てもしない戦争にかり立てた』という者がある，しかし『これと同じことをいまのベトナムの人にいったら，彼らは何と思うだろう』という言葉がある。この言葉を発したのは，いわば上杉の孫弟子にあたる人物である。

仮に旧日本の根本問題がここにあるとすれば，美濃部憲法学は殆んど参考にならない，上杉憲法学は誤謬の一淵源・一徴表として参考になるというべきであろう。」(126-128 頁)

戦後の日本国憲法 上杉学説は広く受け入れられなかったが，軍部や教育界に影響を及ぼしたという。それが昭和恐慌以後の戦争路線へと向かわせたという。他方，美濃部学説が単純明快でオプティミズムに満ちているが，現実はそのように単純ではない。戦後の日本は著者がいうように美濃部的オプティミズムに満ちていたように思う。ただ，占領軍は，これも著者が指摘されるように日本を懲罰的に扱うのではなく，パターナリスティックにいわゆるソフト・ピース路線で善意に日本を教育しようとしたようだ。で，この同じ著者はさらに，戦後の日本国憲法を評して次のように言われる。「日本国憲法は，日本国民を社会契約説の思想家たちが説いたたくましい個人主義に育て上げることには成功しなかったが，日本的集団主義の弊害の矯正者の役割を果たし，団体主義と憲法の個人主義が適当な均衡状態を作り出している間は，一つの社会形態として機能している。一国民の体質を変えることなど不可能であるが，日本国憲法は，日本社会の体質に内在する危険の矯正者として，それなりの機能を果たしてきたというべきであろうか。」(34 頁)このようにいわれている。納得できる。

官のシステム 占領軍は軍部は解体したが，官僚システムは解体せず占領政策の実行のために利用した。軍隊が天皇の軍隊として美濃部的法治の外に自らを置き，天皇の軍隊を標榜して暴走したわけであるが，戦後解体された。他方官僚システムは温存された。戦後の官僚システムの問題点を指摘している，大森彌『官のシステム』東京大学出版会，2006年に，このあたりの問題が指摘されている。

「官」という言葉には，天皇直属という含意がある。その言葉のままに，戦後も政治の外側で権力を事実上行使してきた。行政というられるように，政事にまでウィングをのばしてきた(「行政の政治化」)。また日本の政治家(いわゆる族議員)による口きき政治に典型的にみられる「行政の政治化」がますます進んできている。まさに「小政治」が行われ，「官族複合体」がみられる(239 頁)。さらには，

民も官の下請け機能を果たしたり，官民の利益共同化もみられ，官僚制の拡大がみられる(247 頁)。まさに明治以来「官」の浸透力が広く深いという意味では「行政化された社会」が現出している(258 頁)。いわれるように「官僚制に対する実効的な民主的統制は言うほど簡単ではない。」官僚の必要なことも事実だが，「問題は，変わらなければならないのに変われない官のシステム自体である。」(260 頁)その意味では，美濃部，上杉の対立と現実における統合という問題は今でも色濃く残っているわけである。これをうまく機能させコントロールするにはどうしたらよいのかである。

国家の墮落 『国家の品格』でブームとなった藤原正彦氏の筆致はますますさえていく。すでに発売されている『文藝春秋』2007年1月号所収の「国家の墮落」という論稿は読んでいて胸がすく。「ここ十年余り，とりわけバブルがはじけた後の改革ブームも，政府主導であったとはいえ，国民の大多数が支持していた。経済回復のためなら，不況克服のためなら何でもしよう，というのが国民のコンセンサスであった。不況の本質が，完全に把握されているとはとても思えないのに，『改革』の旗が，特に小泉政権になってからは，狂ったように振られ，国民が歓呼で応えた。」(95 頁)その問題点はこれまで私が何度も指摘したとおりである。そしてつまるところ「日本のアメリカ化」であり，アメリカによる「内政干渉」である(95 頁)。「『官はダメ，民はよい』という単純な論理を旗印に爆走している。市場原理主義によるこれまでの改革にもかかわらず成果がほとんどないのは，まだ規制が残っているためと考えているらしい。」(99 頁)この流れは，美濃部流オプティミズムや戦後民主化標榜と同根であり，「脱亜」の思想である。さらに，経済至上主義は教育にまで及んでいることを藤原氏は危惧されている。藤原氏も言われるように，小学生に英語，パソコン，金銭教育をしてどうなるというのか。そんなものもう少し成長してからやれば十分である。それよりも「読み，書き，そろばん(算数)」という基礎教育をしっかりすべきである。「分数のできない大学生」などしゃれにもならない。どこか狂っているとしか言いようがない。

HPを見て下さい。又何でも意見を。  
皆様のご意見を歓迎します。HP  
(<http://www.finance.ritsumei.ac.jp/matsumura/>)も  
ご覧下さい。また，メールで意見交換しまし  
よう。メールをよこして下さい  
([matsumura@mba.ritsumei.ac.jp](mailto:matsumura@mba.ritsumei.ac.jp))。